
内なる獣性(リーダス一家)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

内なる獣性（リーダス一家）

【Nコード】

N1533B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

黒い牙好きな方は、ブレンダンの奥さんを一度は想像してしまうのでは無いでしょうか。あのすんばらしい兄弟をこの世に送り出してくれた存在ですから、それはそれは素敵な女性だったのでしょう。ブレンダン夫婦のストーリーを考えるのが大好きで色々と考えていきますので、また別の話を作ってしまうかもしれません。ルトガー父がライナスだったとして、彼の支援会話よりく父方の祖母がサカ人>と言う言葉から勝手にサカ人だと捏造しました。少し暗い話ですが、楽しんで頂けると嬉しいです。

「はぁ……。」

椅子に座ってため息をついた男の名はブレンダン・リーダー。

灰色がかった金髪に、厳めしい顔とたくましい体つきをした50代くらいの大男で、

顔や体の至る所に古傷がある。

「親父？」

そんな彼を不審に思っただけ声をかけたのは、

その男の二人いる息子の内の一人、弟のライナス・リーダーである。

「な、何だ!？」

「わっ大きい声出すなよ。それよりため息なんかついてどうしたんだよ……。」

気分でも悪いのか？」

父親を呆れて見ながらライナスは父の側による。

ライナスと父親ブレンダンは顔も髪の色も似ていなかった。

父親に言わせるとライナスは髪も目も母親似らしい。

ライナスは短い茶色の髪に切れ長の茶色の目、細面でハンサムな顔をしている。

だが体格や性格に関してはまさしく親子である。

この二人の共通点は、どちらも長身の大男、

そして熱くなりやすく正義感が人一倍強いと言う事だ。

「いや、まあな……。」

「親父、一体何が言いたいんだ？」

後ろから聞きなれた声がして、

ライナスが振り返った先には彼の兄であるロイドの姿があった。

兄は父や弟程身長や体格はないが、それでも長身で引き締まった体をしている。

顔つきは、どちらかと言うとロイドの方が父親似なのだ仲間たち

は言つ。

少々無精ひげを残しているものの端正な顔をしていて、性格は冷静そのもので頭も切れる。

今度は、ライナスの兄ロイドが疑問を投げかけた。

父親が口ごもる時は、大抵何か後ろめたい事がある時だ。

今日は父親から話があると聞いて二人は彼の部屋に入ってきたのだが、

当の本人が頭を抱えてなにやら考え込んでいるので二人とも困惑していた。

「あの、な、お前達は、俺が再婚すんのに反対か？」

父親の口から出た言葉を聞いて、

ロイドとライナスは顔を見合わせまたその事か、とため息をつく。

父は相変わらず頭を抱え、自分達に背を向けたままだ。

「また何言つてんだよ親父、

俺らもうガキじゃねえんだから余計な気遣いすんなよな。」

ここまでの会話は何度か自分たち親子の間で話題にされた事だった。

ライナスが気遣うように父親の肩に両手を置くともっともらしく肩

叩きをし始めた。

「ロイド、お前はどうか？ ディークは元気か？」

父親は相変わらず息子たちの方を見ない。

父の放った疑問に的確に答えながら何で突然息子の事が出て来るのやら、

とロイドはため息をつく。

「ライナスの言う通りだ。それと、あいつはいつも元気だ。」

ちなみに息子は幼いがやんちゃ盛りである。

「そ、そうか。」

「？ 一体何なんだ？」

「いや、俺もこの歳だから・・・その、変に思われなにか気になつてな。」

ロイドは父が気にしている事に気付いた。

デイクは父を当然おじいちゃんと呼んでいる。

孫がいるのが再婚する・・・

と聞いたらある程度の年齢で分別もある自分達は構わないが、幼い孫としては複雑では無いだろうかと父親は心配しているらしい。ちなみに父は一人の人をずっと愛して・・・

と言うタイプだったから自分の気持ちの変化に対しても戸惑いがあるのだろう。

「恋愛に、年齢や孫の事など関係ないと思うがな。」

「そうだって。それと俺も、もうすぐ父親になるけどな。」

ロイドの言葉の後、見事に見当違いな事を楽しそうにライナスが話す。

ライナスの妻は現在身重だ。

「甘えん坊だったお前が父親とはな。」

まあ、お前の所は奥さんがしつかりしてるから大丈夫だろ。」

「うつせーな、俺だって兄貴の所みたいになんかとやってやらあ。」

ライナスと父親のやりとりを微笑んで見ながらロイドはドアの方へ足を向けた。

「外に出て来る。」

「おい兄貴？外って・・・どこ行くんだよ？」

「散歩するだけだ。すぐ戻ってくる。」

そう言っただけでロイドが向かった先は、アジトから少し離れた所にある、森に面した場所にひっそりと立っている十字架だった。

少しだけ土が盛り上がっているそこは、自分達の母の寝床だった。

膝をつき、十字架に視線を合わせる。

そして十字架の下に捧げられている赤いものを見て、ロイドは目を細めた。

あったのは鮮やかな赤いバラの花束だ。しかもまだ新しい。

この花を、この場所に供えているのは一人しかない。

それは、自分とライナスの父親ブレンドンだった。

父は、いつも暇さえあればここに来て、そして必ずこの花を供えて

いた。

母親はこのバラが本当に好きだった。だから自分達もバラを捧げたいと言ったら父親に駄目だと言いはげられた。

どうしてかとライナスと二人で不満を打ち明けたら、父はロイドやライナスの頭を軽く小突き、照れながら話してくれた。これは、自分が妻に求婚をした時に捧げた花なのだと。

ロイドやライナスは幼い頃から少し前まで、父親の口から母との出会いから結ばれるまでの話を何度も何度も聞かされていた。

傭兵である父は激しい戦いの末、顔や体に無数の傷を負い、倒れ、意識を失った。

本人はそのまま死んだと思ったらしいが、意識を取り戻した自分がいた場所は意外にも遊牧民達の家であるゲルの中。

そして、手に水の入った容器を持ち、微笑みながら自分を見つめていたのが美しいサカの娘。優しいその娘はまだ息のあった父を安全な場所に運び、つきつきりで看病し、労ってくれていたのだ。

体が完全に回復するまで娘、もとい、その部族と共に暮らす内に、父は自分を助けてくれた娘に対する特別な想いを自覚し、娘に気持ちを打ち明けた。娘は大変喜んだと言う。

だが、その娘の部族には風習があった。婚礼の時にはお互いの身につけるものを自分達の手で作る。大切な物をお互いが作り合う事で、それを共に生きていく証としてお互いに交換し合うのである。

そこで二人はいつも身につけられるものとして腕輪を選んだ。力が強く動作も豪快だがその反面細かい作業はてんで駄目な、不器用な父親が、

母親の為に四苦八苦して腕輪を作っている様子を想像すると微笑ましい。

そしていざ求婚の時、父は一度姿を消し、赤いバラを携えて戻ってきた。

恋愛の方面に疎い（と自分で言っていた）父も、バラが愛を伝える花だと言うのは知っていたらしい。

娘はその時初めて自分達の言うバラと言う花を目にしたようで、しばらくの間花を見つめながらぼんやりとしていたそうだ。

（余りの美しさに言葉を失っていたらしい。）
サカに咲くバラは、

普段自分たちが街の花壇で見かけるような観賞用に改良されたものではなく、

花も小さく弱々しいのだ。

娘は顔を赤らめながら微笑み、

バラと、彼の作った拙い腕輪を受け取り、自らが父に作ったものを捧げた。

そうして二人は結ばれたのだ。

（余談だが、父は母をベルンに連れて帰って家を持ち、共に生活する事を望んでいたのだが、

部族の連中を説得して母をベルンに連れて行くのも

とても大変だったと聞かされている。）

まあ、普通は母親から聞かされそうな話だが、

母は大半の草原の民がそうであるよう静かな穏やかな人だったのでその分父親がよく喋っていたと言う訳だ。

父親が昔の話をしている時（まだ生きている時）の母は、

いつもほんのりと頬を染めつつ穏やかな微笑を称えて愛情のこもった眼差しで父と、

すぐ側にいる自分、そしてライナスを見つめていた。
だが。

随分前から、
父の口からあれほど聞かされた母との出会いの話が出る事はなくな
った。

同じ話をしょっちゅう聞かされてライナス共々うんざりしていたの
だが、

何故それが今頃懐かしいと思うのだろう。

「お袋・・・最近、来れなくて悪かった。」

ぼつりと呟く。十字架が、母親そのものであるように話しかける。

母親が死んで以来、何かあるとよくここへ来た。

「仕事があった・・・ってのは言い訳にならないか。」

ロイドは苦笑する。

何て事はない、

父親に想う女が現れてからここに足を運ぶ事が躊躇われてしまっ
ていたのだ。

「お袋、もう知ってるか？親父はまた結婚するだろう・・・。」

ゆつくりと言い、それから付け足した。

「相手はすごい美人だ。信じられるか？」

そう言つて相手の女を思い浮かべる。その女の名前はソーニヤ。

艶やかで黒く長く、ウェーブがかった髪。珍しい金色に近い色の瞳。
光に当たると金そのものに見える。

はつきりとした顔立ちにしなやかな肢体。どこことなく妖艶さを出し
ている。

ロイドは間違いなく、今までにこれ以上美しい女は見た事無いと言
えた。

「言つちや悪いが、

俺は小さい頃、親父にお袋みたいな美人はもつたいたいと思つてた
んだがな。」

今度は、自分達の母親の顔を思い浮かべた。

ライナスと同じ茶色の髪、茶色の瞳。切れ長の目に細面の美しい女性だった。

そう、ライナスに少し面影がある。

（あくまで面影が、である。性格は受けついでないらしい。）
だが、美しさだけで言うならばその女の比ではない。

「おまけに子連れだ。」

明るい若草色の、肩までで切りそろえられた髪、

同色の大きな瞳をしたあどけない少女。

二ノと言う名前だ。

父親はその女……ソーニヤとまだ正式に婚礼をしたわけでは無いが、

ソーニヤにも、二ノにももう何度か会った。

少女がロイド兄ちゃん！ライナス兄ちゃん！と親しげに呼ぶ声が耳に残っている。

「可愛い女の子で、俺は気に入っているがね。」

ロイドは、父親の恐らく再婚相手になるであろう女と、

その子供である少女を思い浮かべながら言葉を続ける。

「もしお袋が死んでなかったら、

ライナスの次にはきつと妹が出来ただろうと思うんだが……。」

そつと十字架に手で触れ、からみついた蔓をとってやる。

そして、父が置いたであろうバラを見つめる。

父親の心の中にあるバラは未だに枯れていないのだ、と安心したよ
うな、

それでいて寂しいような複雑な気持ちになった。

「……また来るよ。」

そつと呟いて、ロイドは母の墓標を後にする。

不意に、強い風が吹いた。

その風が辺りの木々を震わせ、ざわざわと耳障りな音をたてる。

ロイドは少し肩をすくめると、足早にその場を立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533b/>

内なる獣性(リーダス一家)

2010年10月8日21時10分発行